

自己否定が自己肯定に 変わる瞬間

「絵本は心を育てる特効薬」とか「絵本と子ども心の成長」といったテーマで講演をした後、私が翻訳した絵本のサイン会をすると、多くの親たちが「子どもの名前をサインしていただけますか」と言う。もちろん私は喜んでお子さんの名前をメモ用紙に書いていただいて、サインする。お子さんが3人もいる母親も少なくない。少子化が進むなかであって、3人の子たちを育てながら、講演会を聴きに来て、絵本の読み聞かせにも熱心に取り組んでいる親もいるんだと知ると、私は精一杯、その子たちへのメッセージを書きこんでしまう。

そんなとき、よく思うのは、最近の子どもの名前が昔には想像もできなかったほど多彩になっていることだ。昔は女の子は大半が「芳子」とか「恵子」とか、子をつけた名前が多く、子をつけない場合でも、「薫」とか「真由美」などと、よく見かけるものが大半を占めていた。しかし、最近では、「里彩」「萌瑛」「菜夢」「遥華」「梓紗」「明香里」「菜摘」など、数え上げたらきりがなほど多彩で個性的になっている。親たちがわが子に託す思いがにじみ出ていると言おうか。サインしていると、いろいろ想像をかき立てられて面白い。



はこちゃん
かんのゆうこ(文)
江頭路子(絵)
定価 1400円+税
講談社

絵本『はこちゃん』には、そんな時代の風潮が投影されている。小学校の1年生だろうか。3人の少女が地面に棒切れで自分の名前を書いて遊んでいる。

「わたしの なまえ、かんじで こう かくんだ」と、みくちゃんが地面に木の枝で「未来」と書く。「すてきな みらいが やってきますように、って いう いみなんだって」と、親から聞かされた話をする。もう1人の子は、「香音」と書いて、「きれいな おとが きこえてきそうな なまえだから、なんだって」と言う。

ところが、はこちゃんは、やっとな漢字で、「葉子」と書けたものの、どういう意味か説明できず、自分の名前をつまらなく思えてきて、みくちゃんやかのんちゃんみたいに、自分もかわいい名前だったらいいのにと、うらやましくなる。

おまけに、やってきた男の子から、「やーい、やーい、葉っぱの子!」とひやかされる。はこちゃんは涙を流して、公園に逃げこむ。はこちゃんが悲しんでいると、さーっと風が吹いてきて、何か可愛らしい声が聞こえてくる。足下のすみれたちが歌ってくれたのだ。はこちゃんは気分を取りなおして家へ帰ると、お母さんに名前の意味を聞く。お母さんは、丁寧に説明してくれる。

「はこちゃんの『は』は、葉っぱの『葉』。葉っぱはね、おひさまの ひかりを いっぱい あびて、きれいな くうきを つくってくれるの。もしも 葉っぱが なかったら、みんないきていけないの。……」

はこちゃんは、自分の名前が大好きになる。翌朝、登校すると、男の子が「きのうは ごめん」と謝るので、はこちゃんは、自分の名前の意味を自信をもって説明してあげる。

子どもたちの間では、名前の印象とか、言葉の



カーくん と森のなかまたち

夢ら丘実果（絵）
吉沢誠（文）
定価 1500 円＋税
ワイズ・アウル

なま
訛りとか、洋服のちょっとした模様とか、些細なことがきっかけで、意地悪をしたり、いじめたりするトラブルが生じやすい。落ちこんだ子は、それがきっかけで、孤独になったり、引きこもったりしがちだ。そんなときに、親や教師や別の友達が、沈んだ表情の子の通常でない様子を察知して、その子が悲しみや辛さ、口惜しさなどの感情を吐き出せるように、全身で包んであげるような対応の仕方が大事になってくる。はこちゃんの場合、自信を取り戻せるように、母親が名前にかめた親の思いをしっかりと話すとともに、全身で抱きしめてあげる場面がある。その場面こそ、この絵本の大事なメッセージを表している。

もう1冊の絵本『カーくんと森のなかまたち』も、テーマは『はこちゃん』と共通している。主人公の鳥のカーくんは、全身が茶系だが、茶の中に白い毛の部分が水玉模様みたいに点々ときれいに広がっていて、遠くからは星空のように見えるので、ホシガラスと呼ばれる。

カーくんは、「ぼくがぼくでいることがつまらない」と思うようになって、何もやる気がしなくなる。絵本を開くと、見返しには見開きいっぱいに広がる早春の清々しい川と森とアルプスのような山々の雄大な風景が迫ってくる。読者を一気に大自然の中へと引き入れてしまう。物語が始まる頁の絵は、深い森の中だ。大木の太い幹が林立し、新緑の木の葉たちがキラキラと光っている。夢ら丘実果むらおかみかさんの絵には木や森に愛着を抱く絵描きさんの心情が漂っている。

その森の木もれ日のあたる地面にいる1羽のホシガラス・カーくんは、どことなく虚ろだ。ほんとなら生き生きとして、木の枝にとまっているはずなのに。カーくんは、空をすばやく飛ぶアマツバメを見ても、高い小枝にとまっている色とりどりの羽はねを身につけている小鳥のヤイロチョウを見ても、すてきな声でさえずるクロツグミの声を聞いても、すべてうらやましく思う。

カーくんのつぶやきに耳を傾けるシロフクロウのホー先生は、「ほーう、そうだったのか」とうなずく。カーくんは言う。「ぼくなんか、いてもい

なくてもいいみたい。もう、だあれもいないところに、きえていってしまいたい……」

思春期や青春時代に、そんなふうに自己否定や劣等感にとらわれてしまうことは、よくあることだ。他者はすべて輝いているのに、自分には誇りになるようなものは何もない。生きる目標も見つからない。最近の子どもたちの中には、自尊心や自己肯定感を持たない子が30から40パーセントもいるという報告もある。経済的・物質的に豊かになったこの国は、心の面ではどこかゆがんだ社会になっている。

ホー先生にすべてを話したカーくんは、疲れて眠ってしまう。すると夢の中でカーくんは、草も葉も枯れはて風も音もない荒涼とした森の中にいる。ほかには誰もいない。その寂しさに心細くなって、泣き出してしまう。

目を覚ますと、ホー先生と仲間たちがいて、みんなが口々に、カーくんのからだの星空のようなものを「からだに夜空があるみたい」とほめてくれたり、カーくんが森のあちこちに木の実を運んで、新しい木が生まれ育つ役目を果たしていることを教えてくれたりする。カーくんは、はじめて気づく。

「みんなが、いてよかった。ぼくも、いてよかった。ぼくも、ぼくでもよかった……」

今は、このような自信を取り戻すのがなかなか難しい時代になっている。人は互いに認め合い支え合ってこそ、生きがいや生きる楽しさを見出せるものだ。どんな人でもその人が生きていく意味があるのだという、この絵本のやさしいメッセージは、子どもたちが自分を見直すきっかけになるに違いない。